

# 入鹿小だより

～わくわく登校・ニコニコ下校～

熊野市立入鹿小学校  
校長 樋口 佳洋  
平成 30年 9月 14日  
第 1.1 号

## 夏休みの間に「変身」

この夏休みの間に入鹿小学校ではいくつかのことが変わり（代わり）ました。

1つめは運動場の遊具のペンキを塗り直していただきました。シーソー、鉄棒、ブランコ、登り棒、サッカーゴールのペンキが剥げていたのを、色鮮やかに塗り直してもらいました。特にシーソーには天板が朽ちかけていたのを新しい天板への交換もしてもらいました。昨年、滑り台とジャングルジムを塗り直していただいたので、運動場にある遊具すべてが色鮮やかな状態になり、子どもたちも安心して遊べるようになりました。



2つめは、児童トイレのシャワートイレ化です。1階・2階にある児童用トイレ（男女各1）に計4台のシャワートイレが新設されました。これまで児童トイレの個室には和式しかありませんでしたが、これに代わって洋式に変更されました。スペースの関係で和式では2室だったところが1室に減ってはしまいましたが、子どもたちにとっても使いやすくなり、衛生的にもなりました。個室に入ると反応してノズル洗浄がされ、「まるでお店屋さんのトイレみたい」と言っていた子もいたとのこと。せっかくきれいになったのですから、いつまでもきれいさが続くように使ってほしいものですね。



3つめは、ALTの先生が代わりました。アメリカのニューヨーク市から来たアニ・シャーナ・コーラム (Ani Shana Coram) 先生です。12日に初の授業があり、最初はお互いの自己紹介から始まりました。早速子どもたちとうまくコミュニケーションを取りながら、じょうずに授業を進めていました。



アニ先生の好きな食べ物はお寿司と梅干。お寿司は特にいなり寿司が好きだそうです。

このように、夏休みの間にいくつか変わったことがありましたが、とにかく2学期が始まりました。4日は台風の接近で臨時休校となり、出端をくじかれたところはありませんでしたが、自然相手のことなので如何ともしがたいところ。丸山千枚田の稲刈りでは、「本当にするの？」という天気の中、実施を決めました。私は内心ヒヤヒヤでした。実施を決定した直後は「雨があがったかと思えばまた降りだし」の繰り返しで、あとは天気予報が当たってくれることを天に任せるしかありませんでした。おかげさまで、その後は薄日が差すほど天気が回復し、稲刈りを無事終わることができました。田んぼがぬかるんでいたのだけはどうしようもありませんでしたが・・・。

行事が盛りだくさんの2学期を、有意義なものにしてほしいと願っています。

## ブラジルの学校事情

マナウス日本人学校には全日制コースと文化コースの2コースがあります。全日制コースは日本の学校と同じカリキュラムで、主に、私と同じように海外に派遣された会社員や教員、公務員等の子どもが通うコースです。それに対し文化コースはマナウスにいる日系人の子どもたちが通い、日本語と音楽、体育、図工といった技能教科を中心に学ぶコースです。とは言え、文化コースはブラジルで公認されている学校ではないので、卒業資格を得ることはできません。ではどうして、わざわざ文化コースに通ってくるのか、普通の学校はどうなっているのでしょうか。その秘密はブラジルの学校事情にあります。

ブラジルでは子どもの人口に比べて学校や教員の数などが足りない状態です。ですので、学校は日本の定時制高校のように午前の部、午後の部、夜間の部（小学校に夜間の部があるかは定かではありません）に分かれています。マナウス日本人学校の文化コースの授業は午前だけなので、午後は現地の学校へ通うことができ、ちゃんと卒業資格も取れるわけです。つまり、文化コースに通ってきている子たちは、他の子たちの2倍勉強をしていることとなります。そこまでして勉強するのは、しっかりと日本語を身につければブラジルでは結構な収入を得ることができるからです。ひとくちに日系人といっても、今の子ども世代は4世、5世くらいですから、家庭内で普通の会話として日本語を使うことはまずないそうです。言葉を習得するには必要に迫られるのが一番ですから、日本人学校に入り、日本語を教えてもらうと同時に、先生や児童生徒と直接コミュニケーションを取ることで言葉を、そして日本の文化をも学ぶことができます。逆に私たちも文化コースの子どもたちとコミュニケーションを取ることで、ブラジルの文化や言葉を学ぶことができ、身近なところで国際交流ができるわけです。

ブラジルの学校事情に戻ると、幼稚園から公立と私立があり、公立の学校は大学までもが授業料は無料、私立はすべて有料です。義務教育は日本と同じく中学校までで、高校からは入学試験があります。公立の小中学校は児童生徒数は非常に多く、お金を払って行く私立の学校は少数精鋭です。ブラジルのお金持ちの人たちは、子どもたちを、義務教育のうちはお金を払って手厚い教育を受けることができる私立の学校へ行かせしっかりと学力をつけさせておいて、以降は無料の公立の学校へ行かせています。何だか矛盾を感じませんか。しかしこれが現実です。この図式が出来上がってしまうと、「富の集中」が起こってくるのは当然ですね。日本はこれほどあからさまではありませんが、最近の傾向としてはこれに近いものがあるように思うのは私だけではないと思います。

多くの日系人の皆さんは、自分のルーツが日本にあることを誇りに思っていますので、少しでも日本のことを知りたい、勉強したいと思うのも当然です。だからこそ、今の日本人が忘れてしまっている「日本」がブラジルにはありました。この話はまた、別の機会にしたいと思います。